

# 子どもを対象としたソーシャル・サポート研究の動向

教育心理学研究室 川原 誠 司

## Review of the Researches on Social Supports for Children and Adolescents

Seishi KAWAHARA

The function of social supports has been said effective on the people under stressful situations. Although most of the studies were focused on late adolescents and adults, researches on social supports for children and early adolescents have been increasing lately.

This paper reviewed some of the researches on the children's social networks and social supports, and summarized the findings about the types and the sources of supports. Some problems on the classification and the effect of supports, and some future directions were also discussed.

### 目 次

- I. ソーシャル・サポートとは
- II. ソーシャル・ネットワーク研究からの示唆
- III. 実際のサポート研究
  - A. サポート「関係」を見た研究
  - B. ストレスや適応などの変数と関連させた研究
- IV. サポート研究におけるサポートの種類と与え手
  - A. サポートの種類（内容）について
  - B. サポートの与え手（サポート源）について
- V. サポート研究に関する問題点と今後の方向性
  - A. 理論的分類と統計的区分との差異の問題
  - B. 心理的症候や適応的行動への効果測定の問題
  - C. ストレス状況ごとの研究の方向性
  - D. 個人内要因を加味した研究の方向性
  - E. サポートを求めていく（seeking）という方向性

### I. ソーシャル・サポートとは

対人関係の様々な機能の中でも、危機的状況や困った状況におかれたときに精神的、物質的支援を受けるソーシャル・サポート（以下、サポートと省略）の機能が近年盛んに論じられている。サポート研究は地域精神医学（コミュニティ心理学）における予防概念とともに発展したが、そこでは乳房を切除した人やアルツハイマー病、精神分裂病など特殊かつ重篤なストレス状況におかれた人のサポート研究が多く見られる（Orford, 1992）。一方、健康心理学や社会心理学の領域では一般の人々に

までこの概念を拡張・適用し、日常の嫌なこと（daily hassles）を含んだ大小様々なストレス状況への対処行動（coping）の1つとして、サポートを取り上げている（Folkman et al., 1986）。

これら初期のサポート研究は、主に大学生以上の青年や成人を対象としたものであった。その一方で、子どもの研究はあまり行われていなかった。その理由の1つとして青年後期や成人では恋人や配偶者といった特定の親密な相手や近所づき合いなど対人関係の深みや拡がりや考慮されるのに対し、子どもでは親子関係のみが非常に重視されていた点があろう。しかし、近年の発達心理学で子どもの友人関係の重要性が指摘されているように子どもなりの関係の拡がりや深みがあるし、また子どもなりのストレスや悩みごととも存在する。したがって、支えられることについては子どもも大人と同様に重要であるといえる。最近では子どもの発達研究においてもサポートに焦点を当てた研究が増え、従来の発達心理学における親子関係や友人関係の研究結果や知見を発展、統合していったと考えられる。

本論文は、子どものサポート研究を概観し、得られた知見や今後への問題点などについての整理・検討を行う。まず、サポートの基礎をなすと考えられる子どものソーシャル・ネットワークに関する研究を取り上げ、サポートとのつながりを考える。

### II. ソーシャル・ネットワーク研究からの示唆

サポートは周りの人との関係なくしては得られない。

周囲との関係のあり方を見るソーシャル・ネットワーク(以下、ネットワークと省略)研究は、子どもにおいても盛んに行われている(荻野, 1992)。ネットワークの理論にはBronfenbrenner (1977)による“ecology”と呼ばれる4つの階層的システムやLewis (1979)によるネットワーク・モデルなどがある。Bronfenbrennerの考えは、子どもを取り巻く大小様々な要因および要因間の関連を考えることを示唆しており、特に文化差のような大きなシステムに注目しているのが1つの特徴である(Tietjen, 1989)。Cochran & Brassard (1979)はBronfenbrennerの考えをもとに、子どものネットワークを特徴づける多くの要因を挙げているが、その中でサポートとは内容(機能)的側面の一部に位置づけられる。また、Lewisのネットワーク・モデルは対人関係を母子関係に還元する考え方を排し、友人関係などの諸関係それぞれ独自の影響をより強調している。Lewisらのネットワークの測定方法は、「誰から」「どのような」働きかけを受けるかという2つの要因(Lewisらはそれぞれ「社会的対象」と「社会的機能」と呼んでいる)に焦点を当てたものである(Lewis & Feiring, 1979)。

多くの子どものネットワーク研究は、Bronfenbrennerの理論でいえば家庭や学校といったミクロのシステムに焦点を当て、Lewisの理論でいえば社会的対象を最初から子どもの周囲の父母や友人などに限定し、社会的機能も固定している。このような方法はネットワークの構造面を固定化する代わりに、重要な関係からの様々な機能を比較することを重視している。このような機能面を比較したものとしては、Furman & Buhrmester (1985)の研究が代表的なものであろう。彼らはWeiss (1974)の社会的供給(social provision)の考えを踏まえている。Weissは成人において愛着対象が欠如するとき、その対象からの様々なやりとりが途絶えることに注目し、そのやりとりを供給という言葉で具体化しているが、Furmanらはこの供給の考えを子どもに適用し、NRI(Network of Relationships Inventory)という質問紙を作成している。

社会的供給が行われるということは受ける側にもそれなりの欲求があると考えられるが、社会的欲求の年齢的变化についてFurmanらはSullivan (1953)の考えを踏襲し、モデル化している(Buhrmester & Furman, 1986; 井上, 1992a)。また、研究結果からネットワーク機能の年齢差や性差についての7つの主張(proposition)も行っている(Furman & Buhrmester, 1992)。Sullivanのモデル化については発現年齢の早さなどの問題は残されているが(例えばChapman & Chapman,

1980の指摘)、このモデルには年齢の変化につれ友人関係の重要性が増すこと、前青年期における徒党の存在、青年期における異性関係の登場など、子どもの対人関係の発達を考える上で有意義な知見が盛り込まれている。

Furmanらの研究は様々な機能を網羅し、その中の多くは現在サポートと呼ばれているものと重複している。社会的供給の考えはサポートの概念に類似しており、実際、East & Rook (1992)はNRIをサポートの項目として用いている。このようにネットワークの機能に焦点を当てた研究はサポートを考える際にも重要である。

### Ⅲ. 実際のサポート研究

この章では子どものサポート研究をいくつか概観する。レビューする文献は、1)サポートまたはネットワークというタイトルがついているか、内容的にそれに類する研究、2)主に児童期から青年前期の子どもを対象とした研究、を基準とした。なお、これらによって抜き出されたサポート研究は大まかに見て、Ⅱで見た「ネットワークの考えを含み、誰からどのようなサポートがあるのかを記述した研究」とサポート本来の目的である「ストレスなどに関連づけて、サポートの効果を調べた研究」とに分けられるので、別個にして記述する。

#### A. サポート「関係」を見た研究

Hunter & Youniss (1982)は4, 7, 10学年と大学生に、父親と母親、友人との間に3つの機能的関係がどの程度あるのかを質問紙調査した。結果として、統制(control)の機能は友人より両親の得点が高く、親密さ(intimacy)の機能は4学年では母親の得点が比較的高いものの、10学年以降では友人の得点が高くなっている。また、養育(nurture)の機能については両親の得点が全学年にわたって一定かつ高いのに対し、友人の得点は10学年以降になって両親と同程度になっていることがわかった。この研究はサポートという言葉を用いていないが、親密さや養育の質問内容は現在サポート研究で使われている内容とほぼ同一のものである。

Furman & Buhrmester (1985)では前述したようにNRIによる調査を行っている。彼らは5~6学年の子どもに両親や友人など子どもの周りにいる6名の社会的対象からの10の社会的機能を質問している。その結果、両親との関係では全体的に得点が高く、特に女子において母親との親密さおよび親友との間での親密さや親しみの感情(affection)、自己価値の高揚(enhancement of worth)といった機能が高いことなどが見られた。

Buhrmester & Furman (1987) はNRIの中から共行動 (companionship) と親密さの機能を取り上げ、2, 5, 8 学年の子どもに質問している。共行動に関しては8 学年になると家族成員より同性友人の得点が高くなる。親密さについても類似した傾向があり、特に8 学年の女子における同性友人との親密さ得点は非常に高い。また、友人関係における親密さは女子の方が男子より高いという性差も見出されたが、この知見はHunter & Youniss (1982) やFurman & Buhrmester (1985) でも得られており、親密さの性差を示唆するものであろう。

Berndt & Perry (1986) は2, 4, 6, 8 学年の子どもに対し、自分の「友人」および「知り合い (acquaintance)」とのサポート的關係を調査した。彼らは6つの友人関係機能について面接調査し、学年の変化とともに機能の因子構造ならびに各機能得点がどのように変化するかを見ている。そのうち、因子構造については6 学年までと8 学年で、また友人と知り合いでは異なることが示されている。友人については6 学年以下では1 因子構造だが、8 学年になるといざこざがないこと (absence of conflict) という機能が別の因子として出てくるし、また、知り合いについては8 学年になると因子の解釈が難しくなる。また、各機能の得点を見ると友人では親密さの機能において学年差が生じ、また知り合いではいざこざがないことの得点が急激に上昇している。この研究は学年ごとに分析を行っており、分析人数が若干少ないという嫌いがあるが、青年期 (8 学年) での友人関係とそれ以前の年齢での友人関係機能の差異を把握することができる。

Reid et al. (1989) は6~12歳までの子どもにネットワークならびにサポートの質問を実施した。結果として、両親からのサポート得点が全般にわたって高く、また友人については共行動的サポートや情動的 (emotional) サポートの得点が、教師については情動的 (informational) サポートの得点が高かった。この研究はトレーニングを積んだ実験者による個別調査で、子どもに合わせて研究した点は参考になるが、しかし一方で、広い年齢幅で調査したにもかかわらず、両親サポートや友人サポートの年齢的变化や性差については検討されていない。

## B. ストレスや適応などの変数と関連させた研究

Dubow & Tisak (1989) は3~5 学年の子どもにサポートと問題解決スキルについての質問を行い、同時にその親や教師に子どものストレスや問題行動などを質問してサポートの効果を調べている。これによると子ども

自身の評定したサポートや問題解決スキルが高ければ、たとえ親の評定したストレス事象が高くても、教師の問題行動の評定を高めないといった緩衝効果が見られた。サポートの中では友人サポートの効果が多く見られ、また学業成績についてもサポートの主効果と問題解決スキルの緩衝効果が見られている。

DuBois et al. (1992) は12~16歳の青年に対し、2年の間隔で大小様々なストレスと、知覚されたサポート、心理的苦痛ならびに学業成績を測定し、2年前のストレスやサポートが現在の心理的苦痛や学業成績にいかなる影響を及ぼしているかを重回帰分析している。その結果、現在の心理的苦痛には2年前の日常の嫌なこと (daily hassels) や教師をはじめとする学校関係者のサポート (school support) などストレスとサポートの両面が影響するのに対し、学業成績には2年前の生活上の大きな出来事 (major life event) というストレスの側面のみ影響していた。また、逆に2年前の心理的苦痛は現在の日常の嫌なことや家族サポート、友人サポートと有意に関連し、2年前の学業成績は現在の友人サポートと有意に関連していることを見出している。この研究はストレスやサポートの影響を縦断的かつ相互規定的に検討してサポートの効果を現実的に測ろうとしている点は評価できる。しかし、2年という間に様々な要因が混入する可能性があること、同一測定変数の2時点間での関連の強さが排除されていないことなど、2年前のサポートが現在の心理的苦痛へ及ぼす効果がどれほど正確に測れているか疑問が残る。

Taylor et al. (1993) は9~12学年のアフリカ系アメリカ人の青年に親族のサポート (kinship support)、親の権威的な養育態度 (authoritative parenting)、適応の3種の質問をし、“親族のサポート→親の権威的養育態度→青年の適応”というモデルの妥当性を相関係数や重回帰分析などで検証している。彼らは両親ともにいる場合と片親しかない場合とに分けて結果を算出しているが、片親の場合にのみ親族サポートが権威的な養育態度や適応と有意な相関を持ち、親族サポートが養育態度と適応に対し、有意な説明変数になることを明らかにした。この研究ではサポートが間接的な効果を及ぼしており興味深い。しかし親族サポートや養育態度など全てを青年に質問しているため、青年の知覚的要因が全てに影響し、養育する立場である親による親族サポートの知覚とずれている可能性もある。

また、家族研究の領域だが、Windle & Miller-Tutzauer (1992) は高校生に家族サポートならびに飲酒や喫煙などの問題行動を質問紙調査した。サポートの

質問については確認的因子分析より「受け取ったサポート」「与えたサポート」「家族の親密さ」の3因子を抽出しているが、これらは問題行動、特に抑うつ兆候と高い負の相関が見られた。

日本においては、森・堀野(1992)が小学4～6年生に対し、サポートならびに抑うつの構成要素である絶望感とについての質問紙調査を行なっている。サポートと絶望感との関連については、教師サポートやきょうだいサポートの一部に有意でないか有意であっても数値の低い相関があるものの、父母や友人のサポートをはじめとしたほとんど全てに有意かつ中程度の負の相関が見られた。また、性、学年、サポートを独立変数、絶望感を従属変数とした分散分析を行い、サポートの主効果を見出している。

岡安・嶋田・坂野(1993)は中学1～3年生にストレスとサポートの質問紙調査を実施し、サポートのストレス軽減効果を測定している。彼らは4つのストレス源と4つのストレス反応を設定し、それらと6つのサポート源とをかけ合わせた96通りの場合について共分散分析を行ない、異性の親がストレス軽減に効果的に働くこと、「抑うつ・不安」や「身体的反応」といったストレス反応はサポートによって軽減されにくいこと、友だちサポートはあまり効果がなく、家族メンバーや教師サポートの方が有効であることなどを結論づけている。

小嶋・宮川(1992)は小学5～6年の2学級を対象に学級内サポートの調査を行っている。学級内二者間のサポートの授受については中程度の対称性があり、また子ども自身が評定した学級内での孤立感については男子では級友からのサポートの欠如と、女子では担任教師からのサポートの欠如と関連していることを見出している。Rabiner et al.(1993)もこのような学級の枠組みを利用し、4～5学年の子どもをソシオメトリック地位に分類し、学校の仲間に対する見方とビデオで見せた知らない同輩に対する見方(beliefs about unfamiliar peers)、ならびに親からの受容・サポートを質問している。その結果、知らない同輩に対する肯定的見方については親からの受容・サポートとのみ有意な正の相関があった。この関連について、彼らは愛着理論からの説明を試みている。

#### IV. サポート研究におけるサポートの種類と与え手

##### A. サポートの種類(内容)について

サポートの種類分類については、大人のサポート研究で多様性が見られている(浦, 1992を参照)。子ども

を対象とした研究でも大人の場合と平行させていることが多いが、しかし、大人のサポート分類を子どもにも適用してよいかどうかは問題となるであろう。Berndt(1989)はCohen & Wills(1985)の行った大人でのレビューにもとづき、子どものサポートを4つに分類している。この分類はReid et al.(1989)の研究でも使われ、井上(1992b)においても紹介されているので、分類に関する研究者の差異や筆者の意見を若干加えながらここに記述する。

##### 1. 情動的・自尊感情的サポート(emotional support/esteem support)

一緒に悲しんでくれたり、喜んでくれたりと情動的に働きかけたり、また、行動や考えなどを評価し、ほめてくれるという自尊感情を高揚させてくれるサポートの種類である。サポートの1つの特色は情緒的支援の側面であり、例えば岡安ら(1993)のサポート尺度はその大部分がこの領域から構成されている。しかし、この情動的サポートと自尊感情的サポートについては同一の種類にまとめた研究者(Cohen & Wills, 1985; Berndt, 1989)と別個の種類に分けている研究者(和田, 1989; Orford, 1992)とがいて、分類の曖昧さを残す部分もある。自尊感情というものが他の情動と異なる概念として区別され、独立して取り扱われることは多く、理論的に明確な差異を設定すれば別個に分けても意味があろう。ちなみに、この2つについてFurman & Buhrmester(1985)のNRIでは「親しみの感情」の機能と「自己価値の高揚」の機能とに分けている。

##### 2. 情動的サポート(informational support)

周囲からアドバイスや指導(advice or guidance)といった解決への情報を受けるサポートの種類である。しかし、このサポートを受ける人間関係の特徴として親密さ(intimacy)が挙げられ、親密さの概念が自己開示という行動と関連していることを考えると、アドバイスや指導を受けることの前に「相談できる相手の存在」「愚痴をこぼせる相手の存在」といったことが必要になる。加齢とともに親密さが重要になることはHunter & Youniss(1982)やBuhrmester & Furman(1987)の結果からも理解できる。つまり、人がストレスを受けたときには、そのストレスを解決するアドバイスがもらえるということの前に、まずその苦痛の状態を話せること、話せる相手がいることが重要であり、この点も質問する必要がある。情報を得るというサポートはより道具的に働くが、誰かに相談したいという親密さのサポートはより情動的な要素を持っているといえる。

### 3. 共行動的サポート (companionship support)

周りの人と一緒に遊んだり活動することで緊張状態が低減するサポートのことである。この共行動的サポートについては1対1関係での直接的なやりとりが比較的希薄であること、ストレスに直接焦点を当てた解決方法ではないといった点で、他の種類のサポートとは異なる。例えば、森・堀野(1992)や岡安ら(1993)の研究が参照しているSchaefer et al.(1981)の研究ではこの領域を設けていないし、また、Rook(1987)は概念的にソーシャル・サポートとは区別して共行動性を取り扱い、各々の効果が異なることを見出している。しかし、子どもの場合において遊ぶことは特に重要であり、友人関係における共行動的サポート得点の高さも指摘されている(Furman & Buhrmester, 1985; Reid et al., 1989)ので、サポートの種類に入れたほうが有効ではないかと筆者は考える。

### 4. 道具的サポート (instrumental support)

ストレスや悩みごとを解決するための資源や働きかけを直接受けるサポートである。研究によっては実体的(tangible)サポートと呼ばれることもある。これは物質的な援助を含むので、ストレスを直接除去できる可能性も高くなるが、一方で物質的な援助はサポートの受け手の依存性を高め否定的に働くという主張もなされている(Cobb, 1976)。しかし、親子関係の中では物質的な援助をはじめとした道具的関係が成立しているのは必然ともいえるし、また、友人との間で物を貸し借りすることや直接的な働きかけを得るといったことは社会的スキルなどが影響する重要な側面ともいえる。親子間のあまりにも必然的な道具的サポートの場合には、逆に質問する意味が無くなる恐れもあるが、全般的に見て森・堀野(1992)が実体的サポートを含めることの意義を強調したように、子どもにおいては道具的サポートを含めたほうが妥当ではないかと筆者も考える。ただ、情緒的側面のサポートに比べ年齢や関係性による変化が大きいと考えられるので、その効果という点については(否定的効果という可能性を含め)慎重に検討する必要がある。

## B. サポートの与え手(サポート源)について

サポートの与え手としては主に、母親、父親、友だち、教師が挙げられている。筆者もこれら4者のサポートについての研究結果を得ているので(川原, 1993; 1994)、その結果も適宜踏まえ、4者のサポートの特徴ならびに今後の研究の方向性について述べる。

### 1. 母親

子どもについては愛着研究に見られるような母子関係

の研究が盛んに行われており、サポート研究においても母親からのサポート得点の高さが指摘されている(Reid et al., 1989; 岡安ら, 1993)。特に情動的・情動的サポートの得点が高く、親密さの得点では女子が男子より高いものが多い(Furman & Buhrmester, 1985; 川原, 1994)。ネットワーク研究においても母親の養護性(nurturance)が重視されており(荻野, 1992)、母親が与える情緒的色彩の濃いサポートが子どもの発達に大きな影響を与えることが考えられる。

### 2. 父親

父親との関係における機能や効果は母親ほど論じられておらず、サポート得点を見ても母親と比べ父親の得点は低いことが多い(岡安ら, 1993; 川原, 1993)。しかし、得点の低さだけで父親のサポートの重要性や効果を軽視することはできない。一般に、母親に比べ父親の方が子どもに接する時間が少なく、したがってサポートのやり取りも父親の方が少ないことは考えられる。しかし、家族関係のシステムを考えた場合、父親から子どもへの直接的なサポートがなくても、“父親から母親へのサポート→母親の精神的健康→母親から子どもへの適切なサポート→子どもの精神的健康”といった父親の間接的な効果が十分考えられるはずである。近年の家族を取り巻く様々な社会的変化による父親の役割・機能の変化や現状を鑑みる必要があり、父親サポートを研究する余地は残っている。

### 3. 友だち

ここ20年ほどの友人関係(friendship)や同輩関係(peer relation)に関する研究によって、子どもの友人関係の重要性が指摘されているが、サポート研究においても中学生になると、友人サポート得点の多くが父親や母親のサポート得点を上回る(Hunter & Youniss, 1982; Buhrmester & Furman, 1987; 川原, 1994)。Buhrmester & Furman(1986)のモデルを見ても、社会的供給の鍵となる関係は加齢とともに“親→同輩・徒弟→同性友人→異性友人”と全体的に変化しており、友人の果たす役割は次第に大きくなる。共行動的サポートに限れば、小学生でも友人との得点が両親と同様かそれ以上に高いという結果(Furman & Buhrmester, 1985; Reid et al., 1989; 川原, 1994)が得られるなど、遊びの場面や学校生活など親が関与しにくい場面では友人サポートは非常に有効に働くと考えられる。心理的症候との間でも有意な関連が示されることが多く、友人サポートについては従来の社会的発達の分野で研究されてきた諸概念と関連づけて、サポートの円滑なやりとりの実態ならびにストレスへの影響を精緻に見ていく必要がある。

#### 4. 教師

Reid et al. (1989) の研究では情動的サポートが他の与え手より高いという結果が得られたものの、多くの研究では、教師サポートは他のサポートの与え手に比べ得点が低い (Furman & Buhrmester, 1985 ; 岡安ら, 1993)。筆者の研究 (川原, 1994) でもいくつかの学業ストレス以外では教師サポートの希望得点は他の与え手に比べて低く、また小学5年生よりも中学2年生のほうが教師への希望得点が低いという学年差が出たものも多い。これらの結果は教師と生徒の関係を取り巻く様々な制度的、物理的要因とも絡んで、教師サポートの限界や困難さを示唆する。それでも、教師は学校という子どもの生活の場での適応において重要な役割を果たし、授業や学級経営などを通して直接的・間接的に影響を及ぼすことができるはずである。教師サポートの効果については、教師の具体的な役割に沿ったサポートの有無およびその効果を検討することが望まれる。

### V. サポート研究に関する問題点と今後の方向性

#### A. 理論的分類と統計的区分との差異の問題

サポートの種類分類について、研究者間で差があることは前章でも述べたとおりだが、その上、数種類のサポートの混ざった項目を因子分析すると1因子性が高くなるという問題もある (Berndt & Perry, 1986 ; 森・堀野, 1992 ; 岡安ら, 1993)。つまり、最初の分類通りに因子が抽出できないことが多いのである。しかし、統計的区分の結果のみでサポートの理論的分類を無意味なものとするのは早計であろう。

サポートの因子分析ではサポートの与え手を最初から分け、サポートの種類のみを因子分析することが多い。確かに、与え手の差異は種類の差異よりも明確であり、分析レベルが違うという見方もできるが、しかし因子分析の結果を前面に出すのであれば、与え手と種類の両要因の組み合わせで分析したほうが、「種類では分かれず、与え手で分かれる」といった主張をより明確にできるのではないか。筆者の研究で親しさの異なる6人の友人に父母を加えた8人のサポートの与え手と9つのサポート (親については4つ) を組み合わせた62項目のサポートを因子分析したところ、「特に親しい友人との情緒的サポート」「親しさのやや低い友人の情緒的サポート」「友人の親しさを問わない親密さのサポート」「友人の親しさを問わない遊びのサポート」「種類を問わない父および母のサポート」の5因子が抽出された (川原, 1993)。この結果を見ると、与え手が全て区分されるわけではな

いし、逆に、種類が全て1つにまとめられるわけでもないことがわかる。そして固有値の変化で1つにまとめるか否かを判断するなら、与え手と種類とを組み合わせたこの分析でも1因子性は高いので、与え手を区別することすら無意味という結論になってしまう。

因子構造の問題については、項目内容の抽象度が高くなると、回答者が項目間の差異を認めにくくなるという質問項目が大きく影響するので、研究者が研究目的に合ったより具体的な項目を作成し、回答者に差異化できる情報を与えることも肝要であろう。しかし、いずれにせよ、子どものサポート関係には全体的な人間関係のありかたが影響し、それぞれのサポートが「良好な人間関係」という共通の潜在的要因を持っているとすれば、サポートの種類間の関連はある程度高くなることにもなる。

サポートの効果を見るときに多重共線性の影響を排除するために情報を統合するといった実際的な問題はともかく、細かな違いを調べたい場合には理論的分類にもとづいてもよいのではないかと筆者は考える。Furman & Buhrmester (1985) や Reid et al. (1989) の多面的な分類では、サポートの種類によって与え手の得点パターンが異なる結果も得られており、分類することの意義があるように見受けられる。

#### B. 心理的症候や適応的行動への効果測定の問題

サポートがストレスの高低に関わらず精神的健康や適応などに一様に影響するのか (主効果)、高ストレスであるほどよりよく影響するのか (緩衝効果) という問題は、実際のサポート研究でもしばしば取り上げられている (Cohen & Wills, 1985 ; Dubow & Tisak, 1989 ; 岡安ら, 1993)。しかし、研究で取り上げられたストレスや心理的症候としては類似したものが多いにもかかわらず、必ずしも一致した結果が得られていない。

この理由を考えていくと、効果測定に関する方法のばらつきや設定した変数への疑問が浮かび上がってくる。まず、分析方法が研究によって少々異なっており、単にサポートと心理的症候との相関をとっただけのもの (Windle & Miller-Tutzauer, 1992) がある一方、重回帰分析によって効果的な説明変数を見たもの (DuBois, et al., 1992 ; Taylor, et al., 1993) や分散分析での主効果や交互作用を見たもの (森・堀野, 1992 ; 岡安ら, 1993) もある。多変量解析では単純相関よりも明確なモデルを設定し結論を導きやすい一方、モデル設定の理論的整合性やモデル外の変数間の関連などの問題も同時に解決しなければならない。このような分析での効果の有無は統計的有意性にもとづくわけだが、有意性は標

本数でも大きく変化する。有意差が出ないことで効果がないとすることは、大まかな傾向を把握できる一方で、過度の一般化になる危険性もある。

また、モデルの整合性とも関連するが、独立変数と従属変数を設定した研究の多くは諸変数を同時点で測定しているが、サポートの心理的症候への因果を見る最も現実的方法は、サポートが後の心理的症候にどのように影響するか時間をおいて縦断的に研究することだろう。しかし、単に2時点でのストレスやサポート、心理的症候の尺度を独立に質問しただけでは、時間的変化に伴う諸要因が混合するという問題もある。縦断的研究を行うには物理的に様々な困難があるが、我々は時間的要因を視点に入れることでの利点や問題点などを考えつつ、継時的モデルの構築ならびに立証を行っていく必要がある。

また、設定する変数内容の具体性も問題になる。先にあげたDuBois et al. (1992)の研究では結果変数の1つとして学業成績を設定しているが、現在の学業成績を予測すると2年前の学業成績での説明率 ( $R^2$ ) が64%もあり、ストレスとサポートを合わせても説明率が4%しか増加しない。2時点での学業成績間の関連を考慮することもさることながら、学業成績に影響するサポートには教師による授業の工夫をはじめとした、家庭や学校でのより学習に即した具体的項目を設定しなければ効果の意味が薄れるであろう。

以上のような諸問題が残されているので、我々は効果の議論についてはもう少し慎重であってもよいだろう。効果があると安易に決めることは、逆に有意な相関が出なかったり有意な説明変数にならなかったときに、効果がなく必要がないと安易に考えられてしまうことの危険性も同時にはらんでいるのである。

### C. ストレス状況ごとの研究の方向性

ストレス研究においては、各ストレス得点を合計して1つの尺度にする場合も多いが、しかし、それぞれのストレスに対し必要な(効果的な)サポートは一様ではないだろう。岡安ら(1993)は学校ストレスラーとして「先生との関係」「友人関係」「部活動」「学業」に分けて、サポートの効果が異なることを見出している。また、筆者の研究(川原, 1994)では「実存(性格や将来への不安)」「対人関係」「学業」「物理・身体(盗難や入院)」の4領域16場面のストレス状況におけるサポートの希望を調査したが、ストレス領域に応じて希望する与え手とサポートの種類が異なることを見出した。Jacobson(1986)は、Weiss(1976)の分類した危機(crisis)、環境の変化(transition)、不足状態(deficit state)とい

う3つのストレス状況をもとに、危機においては情動的サポート、環境の変化においては情報的サポート、不足状態においては道具的サポートが有効であるとしているが、このようにストレス状況が異なれば効果的に働くサポートも異なる。また、同一のストレスでも時間による変化のため、効果的なサポートの種類が変化することも考えられる。これらの点を明らかにするためには子どものストレスの中から特定のストレスを抜き出し、それに対するサポートを時間を追って細かく見ていく必要があるだろう。

### D. 個人内要因を加味した研究の方向性

子どものネットワークやサポートについては、主に発達差や性差などが検討されているが、一人ひとりの子どもを理解し、細やかな働きかけをするには内的な要因に着目して個人差を検討することも必要である。青年後期や成人の研究においては、外向性や神経質傾向など(Sarason et al., 1983)、特性不安や社会的不安など(Caldwell & Reinhart, 1988)との関連が取り上げられているが、子どもについての研究はあまり行われていない。筆者は青年後期や成人で使われている愛着スタイルの質問紙を中学生に適用し、安定した対人観を持っている中学生は友人とのサポート的関係が多く、対人関係の満足度も高いという結果を得ている(川原, 1993)。子どものサポートに影響する個人内要因の中で、サポートの授受を促進したり阻害するもの、異なる種類のサポートを志向するものなどを検証し、子ども一人ひとりの心理的健康に配慮できるような方向性も重要であろう。

### E. サポートを求めていく(seeking)という方向性

他者に対する肯定的働きかけとしては、向社会的行動や援助行動といった他の類似概念があり、これらと比較したサポートの概念的独立性も考えなければならない。他の概念と比べて、「サポートは身近にいる人とのやりとりを中心に考える」とすると、それまでに形成した人間関係が大きくものいう。ネットワーク研究で周囲の人からの様々なサポート的関係を調べているのは、この点を明らかにしているのであろう。このように様々な対象からの様々なサポートを調べることで与え手の役割は検討されてきた。しかし、「サポートとは自分のおかれたストレス状況への対処方略である」と考えるなら、他の社会的行動に比べ、受け手がより能動的にサポートを求めるという“seeking”の側面も同時に重要である。サポートとは一方的に与えられるものでなく、受け手が利用可能な与え手に何らかの働きかけをして引き出すもの

であるという観点からすれば、サポートを得るのは一種の社会的スキルや社会的コンピテンスと考えることもできる。子どもの問題解決スキルの影響を示したDubow & Tisak (1989)の研究結果は、子どもの能動的態度の重要性を示唆したものといえる。与え手に知覚されるような子どもの情動表出や言語的働きかけなど、サポートを引き出す様々な努力を調べることでスキルの側面が明らかになるだろう。

(指導教官 大村彰道教授)

### 引用文献

- Berndt, T. J. 1989 Obtaining support from friends during childhood and adolescence. In Belle, D. (Ed.), *Children's social networks and social supports*. New York: Wiley.
- Berndt, T. J., & Perry, T. B. 1986 Children's perceptions of friendships as supportive relationships. *Developmental Psychology*, 22, 640-648.
- Bronfenbrenner, U. 1977 Toward an experimental ecology of human development. *American Psychologist*, 32, 513-531.
- Buhrmester, D., & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood: A neo-Sullivanian perspective. In Derlega, V. J., & Winstead, B. A. (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag.
- Buhrmester, D., & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, 58, 1101-1113.
- Caldwell, R. A., & Reinhart, M. A. 1988 The relationship of personality to individual differences in the use of type and source of social support. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 6, 140-146.
- Chapman, A. H., & Chapman, M. 1980 *Harry Stack Sullivan's concepts of personality development and psychiatric illness*. Brunner/Mazel. (山中康裕監修, 武野俊弥・皆藤章訳 1994 サリヴァン入門—その人格発達理論と疾病論— 岩崎学術出版社)
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Cochran, M. M., & Brassard, J. A. 1979 Child development and personal social networks. *Child Development*, 50, 601-616.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- DuBois, D. L., Felner, R. D., Brand, S., Adan, A. M., & Evans, E. G. 1992 A prospective study of life stress, social support, and adaptation in early adolescence. *Child Development*, 63, 542-557.
- Dubow, E. F., & Tisak, J. 1989 The relation between stressful life events and adjustment in elementary school children: The role of social support and social problem-solving skills. *Child Development*, 60, 1412-1423.
- East, P. L., & Rook, K. S. 1992 Compensatory patterns of support among children's peer relationships: A test using school friends, nonschool friends, and siblings. *Developmental Psychology*, 28, 163-172.
- Folkman, S., Lazarus, R. S., Dunkel-Schetter, C., DeLongis, A., & Gruen, R. J. 1986 Dynamics of a stressful encounter: Cognitive appraisal, coping, and encounter outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 992-1003.
- Furman, W., & Buhrmester, D. 1985 Children's perceptions of the personal relationships in their social networks. *Developmental Psychology*, 21, 1016-1024.
- Furman, W., & Buhrmester, D. 1992 Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, 63, 103-115.
- Hunter, F. T., & Youniss, J. 1982 Changes in functions of three relations during adolescence. *Developmental Psychology*, 18, 806-811.
- 井上健治 1992a 人との関係の拡がり 木下芳子(編) 新・児童心理学講座8 対人関係と社会性の発達 金子書房.
- 井上健治 1992b 仲間と発達 東洋他(編) 発達心理学ハンドブック 福村出版.
- Jacobson, D. 1986 Types and timing of social support. *Journal of Health and Social Behavior*, 27, 250-263.
- 川原誠司 1993 中学生のSocial support network 東京大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)
- 川原誠司 1994 子どものストレスとソーシャルサポート 日本発達心理学会第5回大会発表論文集, 219.
- 小嶋秀夫・宮川充司 1992 児童の社会的支援体制と学校適応(2) 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 99.
- Lewis, M. 1979 The social network: Toward a theory of social development. The invited address at the 50th annual meeting of the Eastern Psychological Association. (山田洋子訳 1983 社会的ネットワーク [上] [中] [下] サイコロジー1, 2, 3月号 サイエンス社)
- Lewis, M., & Feiring, C. 1979 The child's social network: Social object, social functions, and their relationship. In Lewis, M., & Rosenblum, L. A. (Eds.), *The child and its family*. New York: Plenum Press.
- 森和代・堀野緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, 40, 402-410.
- 荻野美佐子 1992 ソーシャルネットワーク 橋口英俊他(編) 児童心理学の進歩(1992年度版)
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- Orford, J. 1992 *Community psychology: Theory and practice*. Chichester: Wiley.
- Rabiner, D. L., Keane, S. P., & MacKinnon-Lewis, C. 1993 Children's beliefs about familiar and unfamiliar peers in relation to their sociometric status. *Developmental Psychology*, 29, 236-243.
- Reid, M., Landesman, S., Treder, R., & Jaccard, J. 1989 "My Family and Friends": Six- to twelve-year-old children's perceptions of social support. *Child Development*, 60, 896-910.
- Rook, K. S. 1987 Social support versus companionship: Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1132-1147.
- Sarason, I. G., Levine, H. M., Basham, R. B., & Sarason, B. R. 1983 Assessing social support: The Social Support Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 127-139.
- Schaefer, C., Coyne, J. C., & Lazarus, R. S. 1981 The health-related function of social support. *Journal of Behavior Medicine*, 4, 381-406.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. (中井久夫他訳 1990 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- Taylor, R. D., Casten, R., Flickinger, S. M. 1993 Influence of kinship social support on the parenting experiences and psychosocial adjustment of African-American adolescents. *Developmental Psychology*, 29, 382-388.



- Tietjen, A. M. 1989 The ecology of children's social support networks. In Belle, D. (Ed.), *Children's social networks and social supports*. New York: Wiley.
- 浦光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—サイエンス社.
- 和田実 1989 ソーシャル・サポート (Social Support) に関する一研究 東京学芸大学紀要 第1部門, 第40集, 23-38.
- Weiss, R. S. 1974 The provisions of social relationships. In Rubin, Z. (Ed.), *Doing unto others*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Weiss, R. 1976 Transition states and other stressful situations: Their nature and programs for their management. In Caplan, G., & Killilea, M. (Eds.), *Support systems and mutual help: Multi-disciplinary explorations*. New York: Grune and Stratton.
- Windle, M., & Miller-Tutzauer, C. 1992 Confirmatory factor analysis and concurrent validity of the Perceived Social Support-Family measure among adolescents. *Journal of Marriage and the Family*, 54, 777-787.